



からしだね

2022年4月号
(579号)

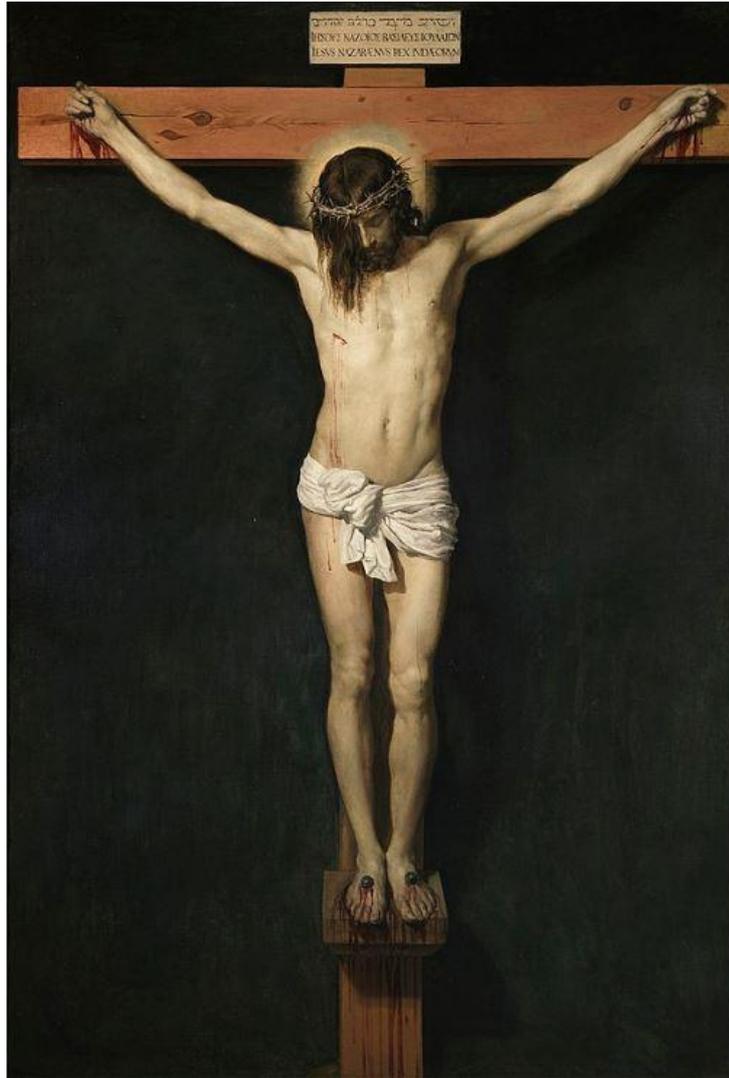
キリストの受難 カトリック池田教会

主任：ノノイ・プラザ神父

住所：〒563-0041 池田市満寿美町9-26

TEL：072-751-2400 FAX：072-753-4624

URL(ホームページ)：<http://catholic-ikeda.sakura.ne.jp/church/index.htm>



本号の記事の主題など

2022年四旬節 御受難会総長メッセージ
4月のガラスケースのみことばと解説
評議会議長の就任挨拶
財務こぼれ話 第6回の後日談

みんなの談話室
正教会にはまっています！
病気のお蔭？
宝塚黙想の家からのお知らせ
今月の表紙の絵について

2022年四旬節 御受難会総長メッセージ

御受難会ファミリーの兄弟姉妹、友人のみなさん

キリストの平和をもって、みなさんに挨拶を送ります。ちょうど、四旬節の歩みを始めるので、わたしは大きな希望に満ちて、**内なる癒し** というテーマについて思いを分かち合いたいと思います。おそらく、みなさんも、この四旬節という恵みの時に、みなさん自身の黙想、回心への呼びかけ、またみなさんが新たにされるために、この **内なる癒し** という分野に焦点を当てたいと思っ

地球規模で起き、（今なお、続いている）コロナパンデミックという困難な年月を闘い、生き延びてきた世界は、今、ロシアによるウクライナへの軍事侵攻によって、世界戦争が起こるかもしれないという恐れに直面しています。この軍事侵攻は、既に、ウクライナ、ロシア双方、それ以外でも、無意味に命を奪い、人々の言いようのない苦しみを引き起こしています。わたしたちは、わたしたちの希望を表明します。そして、すべての善意の人々から平和を切望する声を聞きます。しかし、この希望と平和を求める叫びは、単に今現在の武力衝突を停止し、戦争がない状態を求めているのでしょうか？ もちろん、現在の苦しみの状況に追い込まれている人々のために、わたしたちはそう願っています。しかし、わたしたちの四旬節の巡礼という文脈のなかで、わたしは、次のことを提案したいと思います。わたしたち自身より深くへ進んでいきましょう。そして、わたしたちが真に新たにされるために、主がどこへわたしたちを、わたしを呼んでおられるのか、聴きましょう。なぜなら、それが、「神の時」「カイロス」（まさに時宜にかなった恵みの時）である四旬節の目的地だからです！

わたしは、「地上に平和がありますように」という美しい（英語の）歌を思い出します。この歌の歌詞は、ジル・ジャクソンによって、また、メロディーは、彼女の夫のシ・ミラーによって1955年に作曲されました。ここに歌詞の一節を引用します。

*地上に平和がありますように そして、その平和が「わたし」とともに始まり
ますように 地上に平和がありますようにあるはずだった平和が*

この歌のことは、作者の生い立ちという文脈のうちに理解されなければなりません。あるインタビューのなかで、ジル・ジャクソンは、彼女の生い立ちやこの歌の文脈を語っています。彼女は言います。

「わたしが自殺しようとして、できなかつたとき、わたしは、初めて、無条件の愛 — つまり、神がおられるということを知りました。あなたは完全に愛されている、完全に受け容れられている、あるがままのあなたで。その瞬間、わたしには死ぬことはできませんでした。そして、何かはわたしに起きたのです、難しく説明できませんが。わたしは、真実という永遠の時を体験したのです、その真実のうちに、わたしは、わたしが愛されていることを知り、また、わたしはある目的のためにここにいると知りました。」

もしわたしたちが平和を切望しているならば、わたしたちは平和を作る人々でなければなりません、つまり、わたしたちは、自分自身と平和のうちにいなくてはなりません。わたしの平和への切望は、わたしとともに始まらなくてはなりません。わたしは、わたし自身と平和でいるのでしょうか？ わたしの平和を見出すために、キリストによって与えられた平和を見出すために、わたしのうちで平和への障害であるすべてのものを、わたしたちの

歩む道から取り除かなければなりません。しばしば、それらの障害とは、**内なる癒し**を必要としている、まだ癒されていない傷や痛みなのです。

わたしたちの人生は、でこぼこに満ちています。いつも順風満帆というわけではありません。わたしたちは、誤解に遭遇し、ときには自分が共同体、家族のメンバーから、また、使徒職において、また権威のある人々から不当に扱われていると感じるときもあるでしょう。そのような体験は、わたしたちに深い傷を残し、わたしたちを攻撃した人々をゆるすことを難しくさせます。そして、わたしたちはとても不幸に感じてしまいます。そこには、わたしたちが心の平和を味わうことを妨げ、わたしたちの心を荒んだままに放置する大きな障害物があるようです。このような状況のなかでは、わたしたちの人生の他の分野も影響を受けてしまいます。わたしたちは、正しく祈ることができなくなり、仕事に集中できなくなり、生きる熱意や力が失われてしまいます。そのような時、わたしたちは、**内なる癒し**を必要としていると分かります。

内なる癒しとは、たんに、わたしたちを苦しめている過去からの重荷を癒すことではありません。それはまた、**現在の状況**、関係、そして、**将来の恐れ**や不安、落胆や孤独にも影響をあたえるのです。

著述家のジェラルド・ジャンポルスキー博士は、わたしたちにあるのは、「今」という時だけで、だから、わたしたちは、過去や未来という時に、わたしたちを壊す力を持たせてはなりません、と強調します。彼は言います。わたしたちが、自由のない、愛を欠く態度から自由になるときに、わたしたちは愛によって解放されるのだと。

「時宜に適った時に、わたしはあなたに耳を傾け、救いの日に、わたしはあなたを助けた。」見なさい、今こそ、『時宜に適った時』見なさい、今こそ、『救いの日』

(第二コリント 6:2) (総長メッセージの英語の聖書引用箇所から試訳)

この四旬節に、わたしたちが、さらに愛そうと努め、わたしたち自身を内なる癒しのために差し出すとき、わたしたちは、神が、わたしたちを、他の人々を変えようとされていること — つまり、わたしたちを成長させようとされていること、状況を変えようとするよりも — が分かるようになるでしょう。

わたしたちは、イエスさまがゲツセマネの園で、「苦しみの杯を取り除いてください」(・・・つまり、状況を変えてください)と、どのように御父に祈られたかを黙想することができます。しかし、御父は、そうはなさいませんでした。その代わりに、御父は、もっと善いことをしてくださいました。御父は、イエスさまのところに来て、受難を分かち合ってくださいました。ですから、イエスさまは、カルワリオへ、そして、復活へと向かっていく力を得ることができたのです。御父はご自分を、力ある神としてではなく、**ともにいてくださる神**として現わしてくださいました。このことは、**憐れみ**、(つまり、分かち合われた無力さ)の深い意味を開いてくれます。無力さは、強い希望を生み出します、なぜなら、それは、人間が何者であるかということではなく、神とはなにであるかということに基づいているからです。

これが、キリスト者が弱さを受け容れ、そこに、神という愛がわたしを抱きしめてくださることを発見していく姿勢です。なぜなら、必要な時に、必ずいつもともにいてくださるわたしの神を、わたしは抱きしめるからです。マリア・ブルディングが言うように、「わたしたちの強さは、ときとして、神の働きに対して、わたしたちの弱さよりも大きな障害となりうる」のです。御受難のうちにあるイエスを黙想し、十字架上に釘付けられたキリストを見つめてください。

癒すことと愛することは、手をとりあって進みます。あなたが癒す時、あなたは愛するのです。あなたが愛するとき、あなたは癒すのです。癒すということは、愛するということ、自身が、他の人が全人的に成長し・・・真実そのものを発見するように助けるということなのです。

内なる癒しのプロセスは、とりかかろうとするのに易しい旅ではありません。わたしたちは、それに向かい合う強さを持たなくてはなりません。神のわたしたちに対する無条件の、所有しようとしなない、創造的な愛が、わたしたちを強め、わたしたちがこれまでに苦しんできた（今なお、わたしたちの人生に影響を与えている）傷や痛みに向き合うことができるようにします。そして、その神の愛は、神の現存という力をわたしたちのうちに放出し、わたしたち自身を癒します。

トーマス・マートンは言いました。「キリスト者の愛の根は、愛そうとする意志ではなく、人は愛されている、人は神によって愛されているという信仰である」と。わたしは愛されている、神から— 無条件に愛されている — と信じ、受け容れ、体験すること、これが、わたしたちを自由にする福音です。神の愛は、その上にわたしたちのアイデンティティー（わたしは何者なのか）、わたしたちの完全さ（わたし自身についての真実）、そして、わたしたちの希望（わたしは、わたしの人生をどのように生きるか）が憩う基（もと）なのです。

「解放とは、人が個人的なしかたで、わたしは愛されているということを知り、

そしてこの悟りから行動することができるという体験です」

（ジェラルド・フレ、SJ）

四旬節の旅は、内なる癒しの必要に向き合うために、そして平和という賜物を見出すために心を開いた人々に、今、与えられた、時宜にかなった時です。これは、傷ついた巡礼者として、キリストとともに、その御受難、御死去、御復活のうちにあるキリストとともに歩みましょうという招きです。そして、わたしたち御受難会にとって、キリストの御受難、御死去、御復活は、神の圧倒的な愛と憐れみの体験を発見し、人々に伝えていく確かな方法です。フランシスコ教皇様が、今年の灰の水曜日の説教のなかで表明された希望に、わたしたちも心を合わせましょう。

「わたしたちのまなざしが十字架につけられた主を見つめますように わたしたちの心が、神の心ふるえるようなやさしさに開かれますように そして、主の傷のうちに、わたしたち自身の傷、そして、わたしたちの世界の傷を置きましょう」

御受難修道会総長

ジョアキム・レゴ、CP



4月のガラスケースのみことば

主があなたと共におられる。
主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。

申命記 31:8

(福音宣教委員会撰)

4月のみことばについての解説 ノノイ・プラザ神父

このみ言葉は、モーセが信頼している忠実な弟子であるヨシユアに言った証しの言葉でした。このことから、モーセがヨシユアに指導的役割を委ねたことを思い起こすことができます。

当時、モーセはすでに円熟期を過ぎていましたし、これ以上長生きするつもりもありませんでした。そして、神の指示の下、モーセは人々に対する権威をヨシユアに与えて、自分の後を託しました。ヨシユアはこれにより、神の選ばれた民であるイスラエルの次の指導者となりました。

もちろん、ヨシユアが引き継いだ新しい責務はそれほど簡単なものではありませんでした。長い間、ヨシユアはモーセの強さと知恵に頼っていました。しかしこれからは、ヨシユアが神の民を牧するという困難な仕事を担わなければならなくなりました。

このような時に、年老いたモーセの口から出てきたこの言葉は、ヨシユアを強め、勇気を与えました。

「主ご自身があなたの先に進まれる。主があなたと共におられる。主はあなたを見放さず、あなたを見捨てない。恐れてはならない。おののいてはならない。」

この言葉を聞きヨシユアはこの重大な責任を担う決心をしました。そして、神の摂理の導きの下、ヨシユアのリーダーシップによって、人々は最終的に約束の地を得ることができたのでした。

私たちが自分の人生を振り返る時、モーセの言葉に私たちは共感を覚えるのではないのでしょうか。私たちはいつも悩みや恐れに心を乱されていないのでしょうか。そして、責任を負うのに十分な自信がない時、私たちは愛情深い信頼に基づいてなすべきことを決めるのではなく、恐れから逃げる道を選択しがちです。

皆さん、子供のように純粋な心で神を信頼しているのでしょうか？ 喜び、愛、信頼を持たずに日常生活を過ごしていないのでしょうか？ 恐れを手放すと、何か素晴らしいことが起こることを信じましょう。私たち一人ひとりに与えられた大切な才能の恵みに感謝し、神の力を信頼して歩いていきましょう。

使徒言行録の中に次のような美しい言葉が書かれています「我々は神のうちに生き、動き、存在する。我々もまたその子孫である」(使徒言行録 17:28)。神はいつもあなたの側に居られます。私たちの存在は神から来たものです。私たちは神の子供です。このことを日頃から心に留め、一日一日を大切に生きていきましょう。

世界の平和を祈り、通常の教会活動の再開のために

評議会議長

主の平和

いつもお世話になっております。

このたび、評議会議長を拝命いたしました。ここ2年間、世界的なコロナ禍のなか、ミサにあずかることがいかに幸せなことかを考えさせられてきました。

ようやく今はひと段落つきそうな状況にはなってきました。

しかし、直近の世界情勢では戦争という不幸な出来事も起こっております。

このような状況の中ですが、池田カトリック教会という祈りの場で、世界の平和と安全を祈っていければと思います。今年はできましたら今までのような通常のそして平和な教会活動ができるよう、微力ながらお手伝いできればと思っております。皆様のご協力をよろしくお願いいたします。

財務こぼれ話 第六回後日談

財務委員会

先月の「財務こぼれ話」第6回で、硬貨が迫害(笑)されているということを書かせて頂きました。そして、皆様からの貴重な硬貨での献金を紙幣に換える方法について、お知恵を拝借したいとお願いいたしました。

すると早速に、逆に硬貨に両替してもらいたいというお話を頂き、硬貨が生かせそうな状況になりました。困った時にはお願いすれば必ず道が開けるといふ、教会のありがたさを改めて実感いたしました。

というわけで、復活祭を控えて思案して下さっていたかもしれませんが、当面は安心して硬貨でご献金下さい。もちろん、なるべく紙幣で献金しようというご配慮も、今後のことを思うと大変ありがたく存じます。

これからも、いろいろな愚痴(笑)を書かせて頂くかもしれませんが、どうぞ皆様のお力で教会の財務を支えて下さいますよう、心からお願い申し上げます。

みんなの談話室

正教会にはまっています！

マリア・ベルナデッタ J.U.

ご復活祭をようやく迎える月となりました。私、実は昨年(2021年)3月ごろから京都ハリストス*正教会ちよくちよくお邪魔しております。2、3ヶ月に1回といったところでしょうか？

なぜ正教会に魅かれたかともうしますと、故松本一宏神父さまがまだお元気でいらした時、四旬節の時、ごミサのお話の中で「正教会では復活徹夜祭に『ハリストス復活！ 実に復活！』と深夜に叫ぶのです」という一言とその時のお話がとても感動的で、俄然この「ハリストス復活！」を言いたくてムズムズしておりました。

ようやく2020年秋ごろSNSを通じて京都ハリストス正教会の信者さんと偶然つながりました。

「え・・・、そのころってコロナ真っ最中じゃ？」 → はい、そうです。(笑)

正教会は、「それぞれの教会に自治権が認められている」ので、「他のハリストス正教会」ではどうされているかわかりませんが、「京都ハリストス正教会」の司祭様は、「こういう時こそ祈らなければならない」というお考えで、「聖体奉神礼」(カトリックのミサに該当するもの)を捧げられておられます。ですから、コロナ渦のなかであれ、マスクこそつけますが、

「典礼の最中に大きく歌う」

「鐘もがつつり鳴る」

京都の街に日曜日の朝、教会の鐘が鳴り響く！ 思いっきり歌える！ ああ快感！！(もちろん聖歌は全く違います)

もちろん、京都ハリストス正教会でクラスターは全く発生していません。

コロナ渦で「行き場所をなくしたキリスト教徒(プロテスタントの方含む)や未信者の方々がなんと京都ハリストス正教会の典礼に与られる事が結構増えた」そうです。

ありがたいことに正教会側は歓迎モードで受け入れてくださっています。

残念ながら、ご聖体はカトリックの洗礼を受けていても頂けません。「記念のパン」という聖変化していないものを典礼の終わりにいただくことができます。

私は信者さんが聖体拝領をしているときはひざまずいて「霊的聖体拝領の祈り」を捧げています。

正教会とカトリックでは暦の違いで「復活徹夜祭」がずれる年がほとんどです。

昨年、正教会の復活徹夜祭に夜中の12時から3時間にわたって参拝(さんとう)させて頂きました。(正教会では「与る」ではなく「参拝する」となります)

長年の夢が今年の復活徹夜祭にかなったのです！

もちろん今年も思いっきり「ハリストス復活！ 実に復活！」と言ってくるつもりです。

念のために申し上げておきますが、私はカトリック教会から離れるつもりはありません。遠方に引っ越ししない限り池田教会員です。というわけでこれからもよろしくお願いたします。

キリストに賛美と感謝

※ 「イエス・キリスト」をロシア語で言うと「イイスス・ハリストス」となる。

病気のお蔭？ T.K.

前回「からしだね」に自分の病気の事を掲載させていただいてから、本当に不思議な事を体験しています。「幸せいっぱい～い！」なのです。「何で？」

その理由は、先ず、以前のように毎日のごミサに与られるようになった事！ こんな恵みは他にはありません。ドーパミンの薬が私の体に合わないのです、今のところ薬は全く飲んでいないのです。毎日のみ言葉とご

聖体が何よりの薬です！先に旅立たれた大山さん、辻さんが声をかけてくれます。

「北村さん、ごミサにおいでよ～！」と。毎日ご聖体をいただける事の喜びを誰よりも知っている先輩たちです。私は、彼らが居なくなってしまう後でも、毎朝一緒に小聖堂でごミサを受けているような気がするのです。毎日神様と共に食事をする(俗っぽい言い方で失礼ですが……同じ釜のメシを食う)と言うことは、こんなに強い絆が出来るんだと言う事をお二人亡き後今になって思い知らされます。どうかお二人のように召される直前までご聖体拝領が出来ますように！

次に、驚いた事は、ごミサがコロナで儘ならないと言う状況でも、神様が生き生きと働いてくださっていると言う事を教会……池田教会の中で実感すると言う事です。

コロナで密になってはいけない……と言うのに、私の姿を見て腕を貸してくださったり、優しくそっと肩に手をかけてくださったり、励ましの声を掛けてくださったり……お手紙や心のこもったお見舞い、病院まで車で送ってくださったり、介護用品を貸してくださったり、きれいなお花をくださったり、毎朝のミサにも車に乗せてくださる方がいらっしゃるのです。(私は天使さんと呼んでいます……笑) その一つ一つを私は決して忘れません！

神様は私の必要な事を全て……いえ、それ以上にご存知なのです。教会を離れていらっしゃる懐かしい信者さんからお便りが届いたりもしたのですが、そのどれもこれも私が本当にビックリする事ばかりなのです。こんな事が起きようとは全く予期していませんでした。私はただ、噂で病気の事が広まり、それに尾びれ背びれがつくのも嫌だし、ハッキリしないのに私に病気の事を聞き難いかなと思っただけだったのです。それに病気の事を何回も話すのも大変です。

今まであまり話をしなかった人たちと腕を組んで歩いたり、握手をしたりする事って何て素敵な事なんでしょう！体が触れあう事で伝わる人の温かさと優しさ！コロナなんてクソくらえ!(失礼)です。それに加えてお一人お一人の優しい笑顔……微笑

みが持つ力の大きさはすごい!! これだけでも元気をいただきます！

ひよっとすると私の人生の中で今が一番幸せな時なのかもしれません。私が今出来ている事は、決して私一人の力では出来ない事なのです。しかも、その方たちにお礼を言うと返って来る言葉は必ず「いいえ、何もしていないよ！」なのです→ → →(そこに愛はあるんか～～?)

では、誰が???

私にはどうしても「神様が一人一人の中で生き生きと働いておられる」としか考えられないのです。「そうだ、ここには生きて神様がいらっしゃるのだ。旧約の恐ろしい恐れ多い神ではなく、愛に溢れたイエス様が!!!」

それを全身全霊で感じる時、私は反対を押しきってでも洗礼の恵みを授けていただいて本当に良かったと思えるのです。信仰の恵みがなければ、こんな風には考えられなかったでしょうし、こんな喜びも感じられなかったでしょう！しかも神様から一方的にいただいたもの→ 棚ボタです(笑) 私が感じている喜びの大きさは、私が今担っている十字架の痛みよりも遥かに大きいのです！本当に不思議なこととしか言い様がありません。正に、難病と言われる「病気のお蔭？」なのです。それに、私ときたら、みなさんから学ぶ事ばかりなのです。それを思うと、病気までもが今や嫌な事では無くなりました。体は徐々に不自由になっているというのに……です。

神父様方からいただく数々のお祈りや励ましは、やはり大きなお恵みです。神父様方の魂の大きさと深さは桁違いのスケールです！こんな時にこそ神父様方の愛の大きさと、人としての温かさを通して、神様から愛されている喜びを一層強く感じて、またまた「幸せいっぱい～～い!!」になります。

世界ではウクライナやミャンマー、災害のために苦しんでいる人たちが日々増え続けています。核戦争にまで発展しそうな恐ろしい状況です。

こんなにささやかな幸せでも感じる事が出来るのは、やはり神様の愛の中だけなので

しょう! そのためにも日々のごミサの中で
祈りたいと思います。私は、最後まで前向
きに主と共に歩き続けたいと思います。
I WILL WALK ON AND ON POSITIVELY TILL
THE END OF MY LIFE WITH JESUS!!!
どうぞ、イエス様にしがみついて行くこと
が出来ますように!
MAY I CLING TO JESUS TILL THEN!

お祈りください。
皆さまのご親切に対して、いずれお礼を言
う事が出来なくなるかも知れません。今も
少しずつ言葉が出にくくなって来ているの
を感じます。お礼が言える間に紙面をお借
りして「心からありがとうございます」と
申し上げます。
(2021 3.14 四旬節&ホワイトデー?)に)

宝塚黙想の家からのお知らせ

■ 日帰り黙想会 10:00~15:30

4月12日(火)

指導: 稲葉 善章 神父

4月22日(金)

指導: 山内 十束 神父

4月28日(木)

指導: 染野 治雄 神父



■ 一泊黙想会

4月12日(火) 17:00~13日(水) 15:30

指導: 稲葉 善章 神父

4月22日(金) 17:00~23日(土) 15:30

指導: 染野 治雄 神父

■ カトリック教会のカテキズム

第2・第4 水曜日 10:00~12:00

指導: 染野 治雄 神父

■ 聖地エルサレムを学ぶ

第3 木曜 10時~12時、

指導 笹田六合豊 修道士

■ ギリシャ語で味わう聖書のことば

第1 火曜 10時~12時、

指導 稲葉善章 神父

■ 聖書の基本

第1・3 水曜日 10:00~12:00

指導: 山内 十束 神父

上記の各黙想会、費用等のお問い合わせは
「宝塚黙想の家」まで。☎ 0797 (84) 3111

表紙の絵について

十字架の聖パウロを創始者とする御受難
会修道院に所属する池田教会に通う身とし
ては、一年に一回訪れる四旬節には、心を
新しくして、イエスの「受難」について、
深く思いめぐらしたい。ご受難をいわば、
肌で感じ、その意味を考え、イエスととも

に人生を歩み続けたい。そして神の前にい
けにえとして供えられた、ご聖体を心震え
る思いで拝領したい。日頃、雑事にかまけ
て、いつのまにか日が経ち、あっ、もう日
曜日になったと、いそいで支度して教会へ
行き、ミサにあずかるだけのわたし。ミサ
中にも、ふと雑念が入るわたし。四旬節は
わたしにとって、反省のとき、悔い改めの
ときである。さらには、身近な隣人や、遠
い国の人々へどう手を差し伸べるべきかを
考えて、ささやかなりとも行動に移す決意
をするときである。

さて、今月の表紙は、スペイン、セビリ
アの画家、ディエゴ・ベラスケス(1599~
1660)が1632年ごろに描いた「十字架のキ
リスト」である。ベラスケスはスペイン絵
画の黄金期だった17世紀を代表する画家
で、マネが「画家中の画家」と称賛した。
作品はプラド美術館にある。

ソフィー

編集後記

桜の花がほころび、春がやって来た。
「春」という言葉を調べてみると、
「冬の次、夏の前」、「最も勢いが盛ん
な時期」とある。(Wiktionaryより抜粋)
今年には特に世界情勢や大きな地震、コ
ロナもまだ落ち着きを見せず不安な要素
が多い。まだまだ開けない「冬」のよう
な状況だけれど、草花はきちんと春を感
じさせてくれる。

困難な状況が続くウクライナの街に
も、芽吹く草花が人々の心を癒やしてく
れますように。一日も早く平和が訪れる
よう、祈りを捧げ続けていきたい。

Ana